マンステッド・ウッドのカラー・スキーム

土屋　昌子(学園史料室)

マンステッド・ウッドはかつてガートルード・ジークル（1843~1932）の自邸だった処で、イギリス、サリー州ギルドフォードの町に近いゴダルミングにある。園芸文化第3号で紹介した*Colour Schemes for the Flower Garden*『フラワーガーデンの色彩設計(仮題)』[1]の舞台であり、ジークルは1880年前後に地所を購入後1897年に自宅を建てて移り住み、以後終生ここに暮らした。

『園芸文化』第3号で紹介させていただいたように、『フラワーガーデンの色彩設計』はマンステッド・ウッドで実践されたガーデニングを主たる内容とするため、その敷地の様子がわかると理解しやすい。そこで昨年2006年5月、現地調査のため公開日の第三日曜日に合わせて渡英した。同行者は、現在韓国プルム学園で園芸の教師をしている呉道さん（短園44回専攻科卒)と息子、民(みん)君。現地で新妻先生、ご友人夫婦と合流した。イギリスは例年比一ヶ月遅れの春で、各地のバラの開花は見られなかったが、マンステッド・ウッドではジークルが植えたであろうシャクナゲの大木が満開に咲いている姿は壮観だった。ただし現地の植栽は1900年代初頭の面影はとどめていなかった。配布されたパンフレットによると、ウッドランドは1987年のハリケーンで大打撃をうけ200本ほどの樹木が消失したそうである。ガーデナーが交代した様子でメイン・ボーダーの植栽もぱらぱらとしたもの

エントランス

だった。

実際に現地に行ってみて、現在公開されている部分はジークルが屋敷としていた敷地全体の約三分の二ほどであることがわかり、その規模、周囲の土地の様子、敷地内に残る建造物や区画割など現存する手がかりから、わずかながらもジークルの息吹を感じることができた。しかし当時の草本植物はほとんど残っていないため、ジークルの色彩設計の実際はかろうじて残されている骨組みを見ながら想像力で見るしかなく、20世紀を通じて「伝説」とうたわれ続けた理由がようやくわかる思いがした。

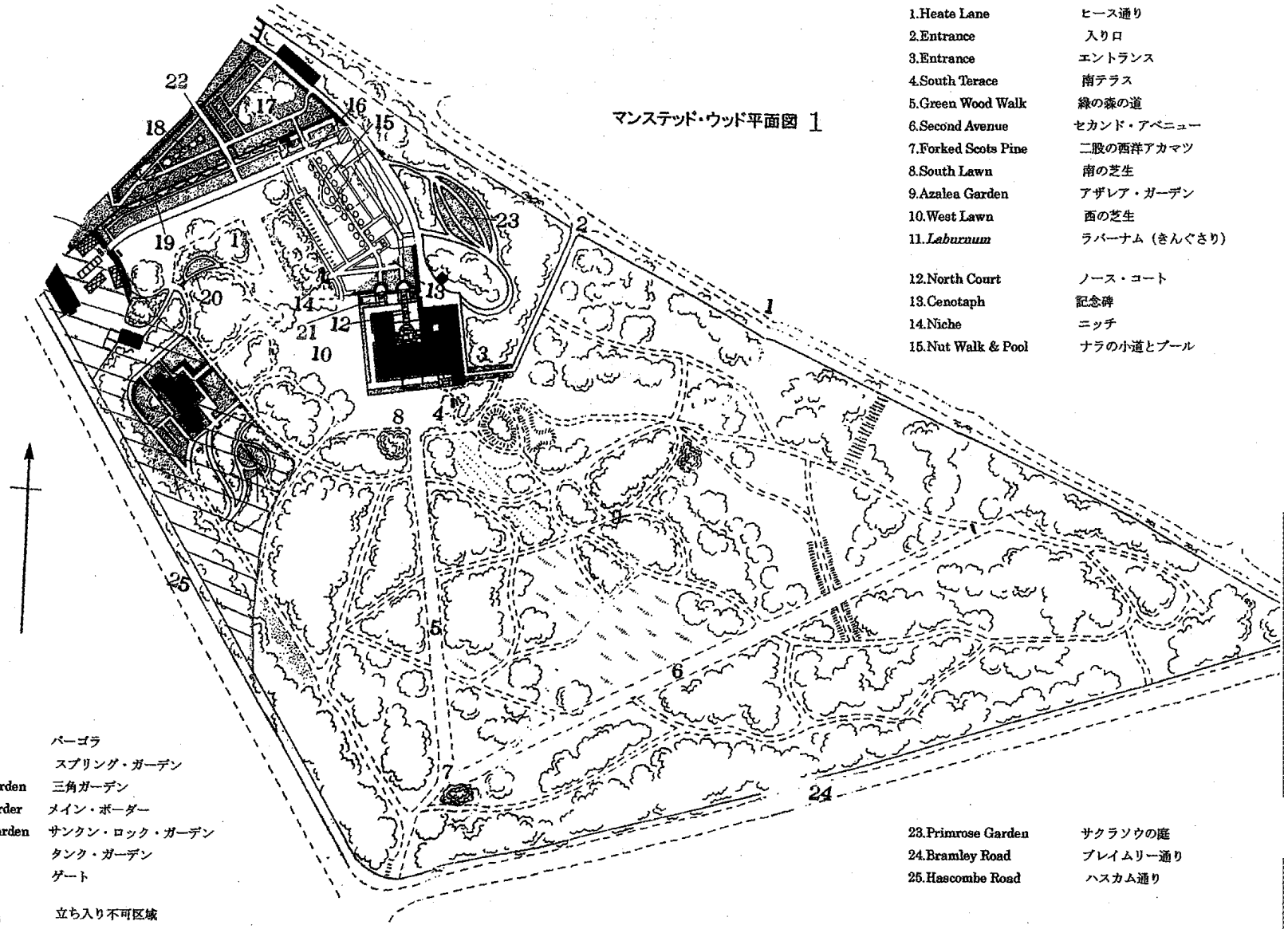
以下に現地報告を兼ねてマンステッド・ウッドの概要を説明し、そこに作られていた色彩の庭について『フラワーガーデンの色彩設計』に基づいてまとめた。

(1) マンステッド・ウッドの庭

ノース・コート

マンステッド・ウッドの屋敷の敷地は周囲を三本の通りに囲まれた三角形で、面積は約6ヘクタール（15エーカー）、東側約半分がウッドランド、西側の頂点から3割ほどの区域が菜園と果樹園、育苗園である。ウッドランドと育苗園の間に母屋が置かれているが、母屋の周囲と西側の菜園・果樹園部分は古い壁〔the old wall〕で仕切られていて、平面図[2]を見ると森の中に家屋敷が置かれているという印象を受ける。家屋を中心にほぼ南へ約100mのまっすぐな通景軸が通り、ウッドランドの主要通路となっている。現在は壁から先のかつての菜園・果樹園の区域は別の持ち主のものとなっている。

母屋の西には、芝生〔lawn〕をはさんで「ハット」〔Hutt〕と名づけられたコテージがある。これは母屋の建築に先立って建てられ、ジークルは母屋建築中の2年間ここに住んだ。「ハット」の周囲にはコテージ風の庭が作られ、ちいさな雑木林をはさんで「ハット」との間に「隠された庭」〔Hidden Garden〕が造られた（この区域の現在公開されていない。平面図1斜線部分）。



マンステッド・ウッド平面図 1

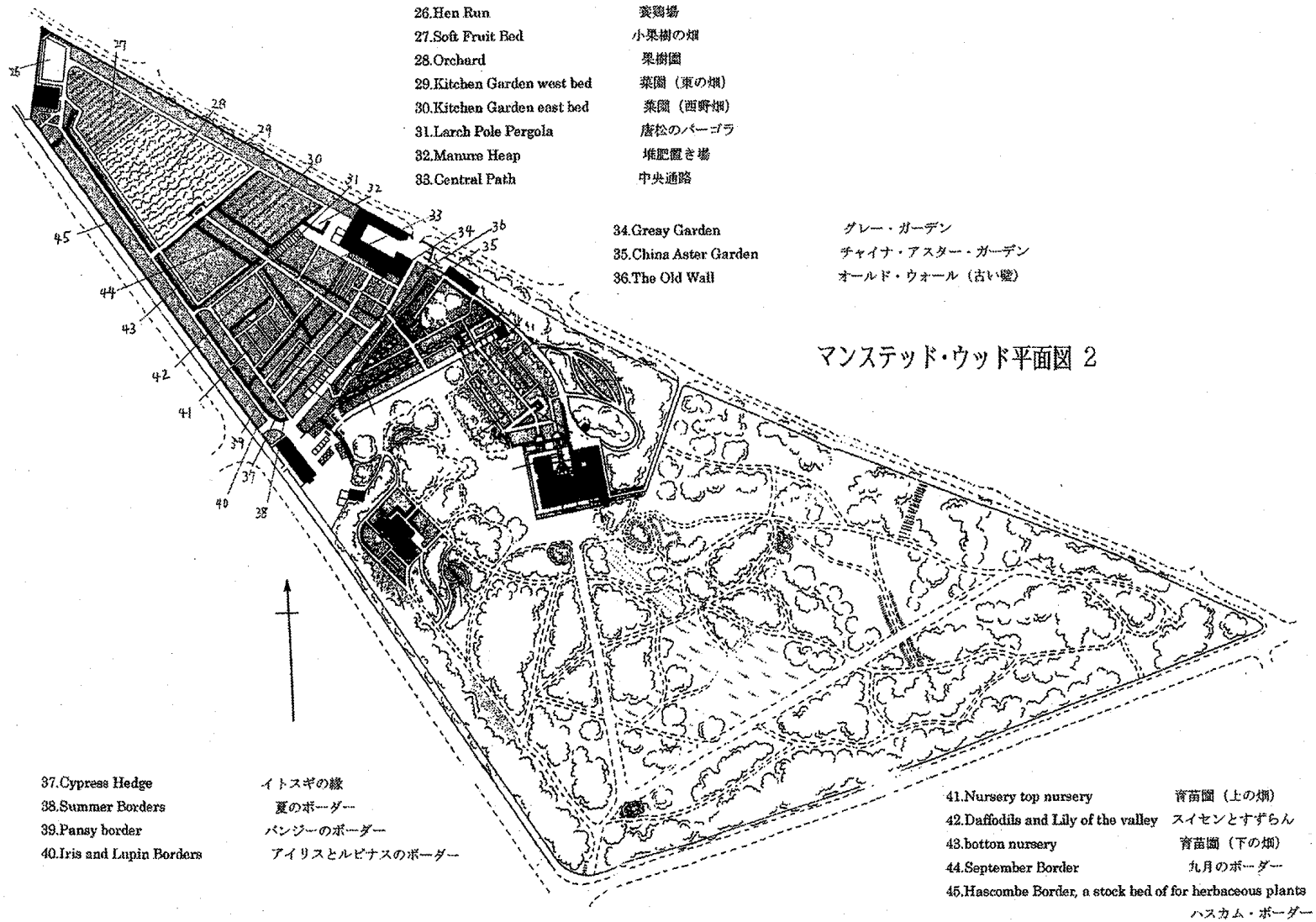
1.Heate Lane　ヒース通り
2.Entrance　入り口
3.Entrance　エントランス
4.South Terace　南テラス
5.Green Wood Walk　緑の森の道
6.Second Avenue　セカンド・アベニュー
7.Forked Scots Pine　二股の西洋アカマツ
8.South Lawn　南の芝生
9.Azalea Garden　アザレア・ガーデン
10.West Lawn　西の芝生
11.*Laburnum*　ラバーナム（きんぐさり）

12.North Court　ノース・コート
13.Cenotaph　記念碑
14.Niche　ニッチ
15.Nut Walk & Pool　ナラの小道とプール

16.Pergola　パーゴラ
17.Spring Garden　スプリング・ガーデン
18.Three corner Garden　三角ガーデン
19.Main Flower Border　メイン・ボーダー
20.Sunkun Rock Garden　サンクン・ロック・ガーデン
21.Tank Garden　タンク・ガーデン
22.Gate　ゲート

立ち入り不可区域

23.Primrose Garden　サクラソウの庭
24.Bramley Road　ブレイムリー通り
25.Hascombe Road　ハスカム通り



マンステッド・ウッド平面図 2

母屋と菜園を区切る壁の母屋側に、主要な花壇〔Garden〕とパーゴラが位置する。古い壁に隣接したナラの木々の間に丸い芝地を作りその周囲に春の球根植物が植えられたスプリング・ガーデン〔Spring Garden〕と、夏を最盛期とする一年草を主体とした夏花壇〔Three Corner Garden〕があり、この二つの庭の母屋側に、砂岩の壁を挟んで、長さ60メートルのメイン・ボーダー〔Main Border〕が置かれた。ボーダーの前の通路はそのままパーゴラに通じ、パーゴラと母屋との間にはハシバミの雑木林とその間を抜けるまっすぐな小道〔Nut walk〕が造られている（現在はここにプールが造られている。（平面図1参照））。小道の先に続く母屋の北側には家屋に面してノース・コート〔North Court〕とよばれた整形式庭園風のテラス・ガーデン〔Terraces Garden〕とタンク・ガーデン〔Thank Garden〕がある。ここは敷石によって舗装され、壁に這わせたつる植物とこれらに調和するコンテナやテラコッタに植え込まれた植物が置かれた。また母屋の北東側のブナの林のなかにはプリムローズ・ガーデンがあった。ここでは品種改良も行われ、サクラソウの新しい優良品種が生まれた。

以上がマンステッド・ウッドの敷地の概要である。敷地の中にウッドランド、早春の球根花壇、コテージ・ガーデン、「隠された庭」、スプリング・ガーデン、夏の花壇、メイン・ボーダー、ノース・コート、プリムローズ・ガーデンがあり、菜園と果樹園の区域にも8月、9月を最盛期にしたチャイナ・アスターの花壇[3]やパンジーの花壇[4]があった。菜園と果樹園を含めると敷地の中に花壇や庭〔Garden〕が14箇所数えられる。

(2) 色彩の庭

敷地内の庭の様子は、早春から冬にいたる季節を追った順序で描かれている。各章はそれぞれ独立した庭に割り当てられ、章のタイトルはほぼその庭の名前となっているが、ウッドランドとメイン・ボーダーは複数の章に重複しているため、本文全体を段落ごとに確認し、どの庭がどの章で取り上げられているかを表1に示した。各庭の名前は、章のタイトルや本文中に用いられている庭の名前、あるいは特徴をよく表す概念を冠して日本語で示

表-1　マンステッド・ウッドの庭と花壇

	庭の名前	庭の名前 (英語表記)	対応する章	最盛期	配色の分類(*)	特徴・しかけ・意図
1	ウッドランド	Wood land	1,2,11,15,17	冬～早春	類似調和	森の小道　林縁の処理　冬の色彩
2	早咲き球根の ボーダー	the Bank of early bulbs	1,3	3月末 ～5月	パステルカラー	ドリフト　シダの間に球根を植える
3	スプリング・ガーデン	Spring border	3、	4月～5月	グラデーション	ミックス・ボーダー
4	隠された庭	Hidden Garden	4、	5月末 ～6月上旬	類似調和	驚きという喜び　静けさ　林縁処理
5	6月の庭	Cottage Garden	5,13	6月	パステルカラー	つる植物　ガーランド仕立てのバラ 家屋との調和・融合
6	宿根草ボーダー	Herbaceous border	6,7,8,10	8月中旬 ～9月	グラデーション	シルバーリーフ ポット植え植物の利用
7	8月のボーダー	August border	8、	8月中旬 ～9月	同一調和 パステルカラー	銀灰色　前縁のキャットミント
8	夏の花壇	Summer Garden	9、	7月末 ～8月	グラデーション	レイズド・ベッド　ウォール・ガーデン 花壇用1,2年草の花壇
9	9月の花壇	September Garden	11、	9月	パステルカラー	キングサリのアーチ ユウゼンギクのボーダー
10	カラー・ガーデン	Colour Garden	12、	言及なし	同一調和 パステルカラー	橙、 灰色　金、 緑、 青をテーマとする庭
11	テラス・ガーデン	Terrace Garden	14、	周年	類似調和	コンテナの配置 ガーデンファニチャーの色の問題 つる植物　家屋との調和・融合
12	果実の庭	Furuit Garden	16、	周年	言及なし	エスパリエ　ミックス・ボーダー 楽しみとくつろぎの庭
13	水仙の庭	Nurcissus Gaden	2章15,16段落	春	同一調和	ワイルド・ガーデンの発展
14	桜草の庭	Primrose Garden	3章 23段落	春	グラデーション	品種改良　色の作出

＊配色の分類は三井秀樹によるガーデン・カラーの分類を参考とした。『ガーデニングの愉しみ』pp.68～80.「ガーデンカラーとテクスチャ」参照

し英語名を対照した。順序は各庭に設定されている最盛期に従った。

配色の分類は三井秀樹氏による「ガーデンカラーの分類」を参考とした[5]。ここでは色彩調和の基本を同一調和、類似調和、対比調和の三つとしこれにグラデーション（漸変）、パステルカラー（高明度有彩色）を加えている。配色によって14の庭を分類すると次のようになる。（ただし果実の庭については色彩に関する言及がないため含めない。）

①類似調和（抑えられた色調）の庭	ウッドランド、隠された庭、 テラス・ガーデン
②パステルカラーの庭	春の球根のボーダー、 6月の庭（コテージ・ガーデン）、 9月の花壇
③グラデーションの庭	宿根草ボーダー、春のボーダー、 夏の花壇、桜草の庭、
④同一調和の庭	水仙の庭、8月の庭、カラー・ガーデン

表-1より本書の構成をみると、ウッドランドに五つの章、宿根草のメイン・ボーダーに四つの章が当てられており、ジークルの主たる関心がこの二つの庭に集中していることがわかる。分類した配色によって比較するとウッドランドは類似調和、宿根草のボーダーはグラデーションの庭であることから、本書の主眼はウッドランドの抑えられた色調と宿根草ボーダーのグラデーションによる色彩設計に本書の主眼が置かれていると推察できる。

ウッドランドと宿根草のボーダーの後は、春の球根のボーダーとコテージ・ガーデンに各二章が当てられている。柔らかく上品な印象を特徴とし、ジークルやロビンソンを源流とするイングリッシュ・ガーデンの色使いとして現在に至るまで人気の高い、庭の色彩である。この四つの庭はマンステッド・ウッドの主要な庭として考えられる。

本文中には手書きの設計図が12枚含まれている（カラー・ガーデンは5枚でひとつと数える）。その中から九つの庭について色彩設計と植栽の実際をまとめてみたい。

(a) ウッドランド

ウッドランドは5つの歩道とシャクナゲ、アザレアの庭を含む。森自体と林縁で、細心の注意を払って樹種が選別され植栽されている。森は造園が始まった時点で20年後の好ましい印象—落ち着き—が意図された。注意深い観察によって樹種を限って間引した造成林は、目標どおりの結果をもたらしたことが満足げに強調されている。

森をめぐる5本の歩道はそれぞれが特徴を持って「さりげなく森へ溶け込む」ことを意図してつくられた。これらの歩道は森の絵画をめぐり楽しむ小道であり、それぞれの特徴を示すシダの小道、ユリの小道など固有名詞がつけられている。小道の草刈は道を「森の自然と正確に同じもの」にするために人が鎌で行う。草刈に機械を使う場合には、「森の情緒をそこなう場違いな整然とした刈り込み」を避けるために、草刈鎌で追い刈りを行うよう指示されている。

ウッドランドへ…

シャクナゲ、アザレアの庭は6月の開花期のために慎重な色彩設計が行われる。花の色で区分されたシャクナゲの配置は、日光がよく当たる部分には白、ピンク、ばら色、赤のグラデーション、日陰に紫系を配置した。紫の花の色は「純粋で涼しげな紫色(*Rhododendron ponticum*)」とそれとの組み合わせのよいいくつかの品種が選ばれている。周囲の森の樹種はシャクナゲのつややかで暗い葉の繁みとの対比がきわだつキイチゴや西洋クリ、白樺の樹幹が「絵画的な効果を生む」として組み合わされている。

ウッドランドの林床の植栽は、シダ、トウワタリンドウ、ヤマユリ、ビルベリー、カンアオイ、ヒメマイズルソウ、ツマトリソウ、ジギタリス、クチベニズイセン、ワラビやノイバラなどである。それぞれの花の色や開花期に応じて適切な場所が指示されている。花の色は白か、黄色あるいは目立つ花を付けないもの(例;カンアオイ)など目立たない植物が使われている。

家屋に隣接する芝生から雑木林へ向かう林縁を、色彩設計した設計図がある。本文中に設計図に関する説明はないが、「背景に西洋ヒイラギと背後に白樺の林があり、灌木の植え込みを花の色と調和させることによって、視線を違和感なく森へ導いている（大意）（1章17段落）」とある。設計図をみると花の色はピンクで、灌木はシャクナゲ‘プラエコックス’、ヨウシュジンチョウゲ、前段の背の低い灌木にはエリカ‘ヒブリダ’、エリカ‘カルネア’が、タネツケバナ、ヒマラヤユキノシタ、レンテンローズの赤（ピンク）、カタクリと組み合わされている。またこれらの植え込みの間はシャクナゲの灌木を背景として、ケマンソウやアメリカイワナンテンなどの淡い黄色と隣り合うようにミヤマホタルカズラのブルーが組み合わされており、補色の効果を含めて、パステルカラーで統一されている。

またウッドランドは冬の植栽を楽しむために提案されている点で重要である（17章）。ジークルは冬の風景の色彩を慰めやリフレッシュメントの源泉として捉え、ガマやヨシなど水辺の植物が、冬の間明るくあたたかい色彩のまとまりを提供し、常緑樹は冬の冷え冷えとした不快感を取り去ると述べている。また、葉を落としたバラの茂みにジークル自身が暖かい雰囲気を感じてなぐさめられている。冬の庭の色彩設計は樹皮の色に注目し、枝が鮮やかな赤や黄色、橙などの色をもつヤナギの品種や、樹皮の美しいバラの品種を用いた植栽を提案している。

(b) 早春の球根花壇

「満足のゆくこころよい球根花壇」を作ることは、ジークルの長い間の課題であった。球根花壇の難しさは、開花後の花のあとが見苦しいこと、葉が枯れた後は球根がどこにあるかがわかりにくく、次の植え替えのときに球根を傷つけやすいことにある。球根を植え替えないで1年を通じて花壇を見苦しくしないこの方法はおそらく、観察をベースにしたひらめきによって得られたものだろう。

解答は球根直物とシダ植物を混植したことによって得られた。シダを流れるように植えた間に球根を植え込み、前段にサクシフラガを組み合わせている。このような細長い植え込みによって花が終わった後にできる見苦

しい空間を隠すことができる。開花期が終わり、葉が地面に倒れると同時にシダの新しい若い葉が伸びて、球根植物の葉が枯れたところを覆いながら美しい葉を見せるのである。ジークルはこの細長い植え込みをドリフト(drift) と呼んでいる。このようにまとめて植えることによって花の色が一つの色の塊となり、花壇の色彩の組み合わせがより効果的にできるようになった。

色彩設計はヒマラヤユキノシタ、オランダエンゴサク、カタクリ、レンテンローズを使い、ピンクのグラデーションを作る。次にツマトリソウ、ヒヤシンス、クロッカスの白にスキラ、チオノドクサ、プシキニアの透明感のあるブルーと淡い紫が続く。パステルカラーの組み合わせである。ブルーの隣に白を配置したあと、そこから白と黄色の組み合わせに変化する。黄色は水仙の品種を3種とヘメロカリスを用いている。黄色に隣接して再びオランダエンゴサク、ヒマラヤユキノシタ、レンテンローズのピンクが入り、繰り返しによって統一感が加わり「ここちよく興味をそそる」植栽となっている。

(c) スプリング・ガーデン

スプリング・ガーデンは4月の中旬から5月の初めの三週間を最盛期とする。春の花壇の問題は4~5月に葉を茂らせる植物が少ないために、花壇全体が貧相になるうえ、夏用の植物に植え替えられると、一時的な間に合わせのような印象を与える点にあった。ジークルはこれを解決するために、ひとつの花壇の最盛期を限定することを考え春と夏の花壇を別々の場所に作ることによって植え替えを最低限にした。それによって、球根植物や一年草と共に宿根草(初めからそこにあって自然に育つことができる植物)が使えることになり、植物の選択の幅が広がった。このような植生(vegetation)を異にする植物を混植するボーダーは、宿根草のみを用いた宿根草ボーダー(herbaceous border)と区別されミックス・ボーダーと呼ばれる。

スプリング・ガーデンはメイン・ボーダーと砂岩の壁を隔てた反対側にあり、これに沿ったボーダー花壇となっている。色彩設計の特徴は柔和な色と強い色の組み合わせで、背景には西洋イチイあるいは西洋ヒイラギを使い、暗めの緑色を背景として効果を上げている。土地の形状も変化をつけ、

三角形の盛り土を造って色彩が流れる様子を強調することを試みている。

土手の部分では、ピンクと白を基調に淡い青から白と黄色、金色の葉を組み合わせる。球根植物は白とブルーを基調にヒヤシンス、ムスカリ、シラー、チオノドクサ、プシキニアなどが、花の色の濃淡や葉の色に注意して品種が選択されている。

主要な色のかたまりは、前段から後段への色の連続を考慮し、前段の淡い色合いから後段へ移るにしたがって深い色合いに変化する。前方と中央のスペースは淡い色のプリムローズ、ティアレラ、淡い色の水仙、アイリス、ウォールフラワー、白のアネモネ、淡い色のヤマハタザオ、薄い藤色のアイリス、白と黄色のチューリップである。中段には軽い色合いの間にやや強い色合いの真黄のチューリップ、ニオイアラセイトウ、ドロニクムが入り、後方の強い色彩は緋色で、黄色とオレンジのフリチラリア、緋色、オレンジのチューリップ、茶のウォールフラワーが組み合わされている。ボーダーの端は平板な印象を避け、絵画的な効果を得るために、背が高く造形的なハアザミ、キミガヨラン、トリトマが配置された。隣接した細いボーダーでは、赤のサクラソウと銅葉のツボサンゴの寄せ植えが色彩の調和を生み、頭上にバラ（マダム・アルフレッド・カリエール）とクレマチスのアーチが配置された。

春の花壇の記述でピンク色の調和は次のように述べられている。「ケマンソウの群落がいくつか、優雅に茂って背の低いピンクのチューリップの上にアーチのようにかかり、同時にすぐ後ろのシャクヤクの葉のピンク色を帯びた緑と魅力的な調和を醸し出している。ここはピンクのチューリップが大量に植えられ、薄青色のワスレナグサの水たまりへ大胆に流れ込んでいく。絵が力強い深みのある緑色を要求するところにはイベリスを多めに加え、やわらかい灰色がかった色調を加えれば絵画的な効果が高まるところにはオランダエンゴサクを植えるとよいだろう」（3章15段落）このような表現からはジークル流の生きた絵の描き方がうかがわれる。ただし本文中にはスプリング・ガーデン全体の図版はあるが色彩設計のプランは示されていない。

(d) コテージ・ガーデン

コテージ〔cottage〕は本来いなかの農民が住む家屋で、英国の典型的なコテージは背の低い草ぶき屋根で石造りの小さな家である。周囲にはしばしば小さな菜園と家畜小屋がおかれていた[6]。ジークルは自分の家を「比較的大きな部類のコテージ」と書いているが、母屋はその大きさからいっても中産階級に属するジークルが住んだ家である点からいっても、あくまで「コテージ風の屋敷」であって本来のそれではない。これに対して同じ屋敷内に母屋の建築中に住むために建てた「ハット」はベッドルーム二つの小さな造りで、本来のコテージに近い。ジークルはここにコテージ・ガーデンを作った。

コテージ「ハット」の庭

5章のタイトルは「6月の庭」〔June Garden〕で、「ハット」の周囲の庭を中心に、いくつかの色彩設計について植物の組み合わせ方が紹介されている。色彩設計は関連する他の部分との関係で捉えにくいが、概要は以下のとおりである。

「ハット」は家の周囲全体に植物が植えられている。エントランスは狭く(人二人が並んで通れる程度)敷石で舗装されていて、西洋イチイのアーチがかかっている[7]。エントランスを抜けると右にはクレマチス・モンタナがからみつき、這い登った枝がてっぺんから垂れ下がっている西洋ヒイラギがあり、左側を進むとバラのアーチがあってオシダとスィート・シシリーが足元を覆っている。

正面と背後の部分が6月を最盛期として色彩設計されているが、日常よく使う小道がそばを通っているという理由で開花期は6月に限定せずに花が植えられている。正面の庭の西側のボーダーは白い花が集められたホワイト・ボーダーである。キンギョソウ、オダマキ、キツネノテブクロなど花弁の色は同じ白でも、高さを違え、向きを違えて咲くさまざまな表情のある花々の群植となっている。このなかに白い色をひきたてるために、薄いライラック色とピンクのアイリスが入り、背景となる灌木には乳白色〔マホガニー・ホワイト〕の白い羽毛のような花をつけるヤマブキショウマとピンクのシモ

ツケソウ、シャクヤクが配置された。前段になる下草は、灰緑色の葉で花がうすい紫色のキャットミント、青紫のフウロソウ、淡黄色のスパニッシュアイリスである。

通路側はオランダシャクヤクのボーダーで、シャクヤクの花が終わるころにオレンジ色の花を咲かせるヘリング・リリー[8]の寄せ植えを配して、コテージ・ガーデンの情緒を意図的に作り出している。

南西の一角にはバラが仕立てられ、スタンダード仕立てのバラは白と赤の好みの品種が「古典絵画のバラ」として紹介されている。(ばら色のセレスティアルと白のマダム・プランティエ。開花期は7月初め。) ここには西洋イチイで日よけが造られたベンチが置かれ、この「絵」を見る視点が定められている。

北西のやぶは、サンザシとクロベを背景とした大きなツルバラの繁みで、ジークルはこの大きなツルバラが、「ハット」の台所の窓のほぼ向かいにあるので「キッチン・ローズ」と呼んでいた。満開になるとその花の明かりが部屋の中まで差し込んでくると書いている。このバラには3mほどに成長する背の高いバーバスカムとハナウド、白のキツネノテブクロが組み合わされている。

背後の庭は横幅が広い (手入れがしにくい) という理由から、中央をローズマリーのボーダーで区切った形になっている。ハットに隣接する側すなわち家からの視線が届く範囲はホワイト・ガーデンが繰り返され、反対側は開花期の長いポピーを使ってやや強い色彩が、黄色から赤のグラデーションを意識して配置されている。

(e) メイン・ボーダー

敷地の中でメイン・ボーダーとよばれているのは、全長60メートル、幅4メートルの宿根草を中心とした花壇である。その概要は6章に述べられているが、続く7章8章と10章で季節を追って取り上げられている。

この花壇は手入れの期間を7月中旬から10月とし、8月の下旬から9月に開花期を迎える遅咲きの宿根草 (3~5年を経過したもの) を主体とする花壇である。背景は高さ3.3メートルの砂岩の壁で、この壁に沿って低木の常緑

樹やつる性植物を植えて花壇のスクリーンとしている。背景の低木、灌木類は18種、花壇に植え込まれている植物は約80種類で、全体でおよそ100種類の植物が使われている。

色彩は花壇全体がグラデーションを描くよう設計されている。すなわち緑を背景として西端から青、青灰色、白、黄、淡いピンク、赤紫、赤、赤橙、橙、橙黄、黄、淡黄、淡いピンク、紫、ライラック色、青灰色へと色が漸変するように、開花期の花の色を素材として配色し植栽を試みた。このとき、60メートルのボーダー全体を1点から一枚の絵のように眺める視点と、ボーダーの縁を歩きながら眺めていく場合の二通りの鑑賞の仕方が考えられている。4メートルの幅の間はだいたい前段、中段、後段の区分があり、高さは前から後ろに徐々に高くなる。目安として前段は15cm~60cm、中段は60~120cm、後段は150~200cm以上の高さのある植物があるまとまりを持って植えられる。

この配色に関して、ジークルは目の色覚と残存現象を説明し、眼はある色で飽和させることによって、「補色の法則にしたがって」次に現れる色を予測すると述べている(6章6~7段落目参照)。ボーダーの縁を歩きながら花々を眺めていく場合、目に入ってくる色に対する目の色覚と残像現象を利用した色の配置を行っているというわけである。このことが実際に見る人にとってどのような現象になっていたかははっきりしないと言わざるを得ないが、これはジークルが科学的な色彩論の知識を持っており、それを実際に応用しようとした例であるといえるだろう。

ジークルの色彩設計の大きな特徴のひとつは、灰色の葉の植物を「下地として」組み合わせることにある。銀灰色の葉の植物(silver-leaved plants)として使われるのはラムズイヤー、シロタエギク、サントリナ、キャットミント、ヘンルーダなどであるがこの効果については繰り返し述べて強調している。メイン・ボーダーでも両端の灰色は眼に涼しげな印象を与えるので中央の強い色彩のあたたかさを高めるとして、これらの葉の色も明暗のグラデーションを考えて配置されている。

6章では宿根草の植栽の基本的な知識、個々の植物の花後の処理、空いて

しまった空間の処理やアクセントになる色が欲しい時の方法などが述べられる。ひとつの花壇を美しく維持できる期間を1ヶ月から3ヶ月であるとしたジークルであるが、メイン・ボーダーのような100種類以上の植物を使った大きな花壇を3ヶ月という長い期間にわたって維持するためにはさまざまな工夫が必要となる。宿根草を主体とした最大の理由もそのひとつであろう。

7章ではメイン・ボーダーが2ヶ月目になる7月を取り上げ、6月には少なかった花が咲き始めてカラー・スキームの意図が次第に明らかになることを説明する。つづく8章はようやく迎えた最盛期(8月下旬から9月)の記述である。

10章では9月に最盛期を迎えた中央の赤の色彩の豪華さが描かれている。3ヶ月目をむかえたボーダーは植物も部分的に変化していく。前段ではカスミソウがキンレンカに、中段ではルドベキアがヘリアンサスに引き継がれ、後段ではカンナが最大になってようやく後段の背景の最も高い部分が現れる。刻々と変化していく植物の集合体であるボーダーから見苦しいものをいっさい排除し、いつ、どこをとっても最大限に美しく保つことは至難の業であったと考えられるが、そのために植栽の計画性が求められ、色彩設計が必要であったということは明らかである。

(f) カラー・ガーデン

12章は「特別な色彩の庭」と題して、実際には実在しない想像上の「色彩の花壇」が設計図を基に述べられている。ジークルは単色の庭への尽きることのない興味を抱いているようである。実は本文中では実在しない庭を願望によって設計図だけ書いてみたという説明になっているが、灰色の庭は8月のための庭として育苗園に隣接していたボーダーに、また白い庭は6月のコテージの庭で試みられていた。

設計図では橙、金色、灰色、青、緑の5色の単色の区画が西洋イチイの生垣でひとつのつながった庭となっている(ただし灰色の区画の生垣はその葉の色が灰色の葉の植物と調和するという理由からギョリュウが使われている)。配置は中央に金色の庭をおき、「色彩の法則」によってその左側を橙、

灰色の庭とし、右側に青と緑の庭が置かれている。

橙の庭については、灰色の庭との並置の効果がは目の補色(残存効果)によって説明される。「橙の花を見たあとの目には、紫色の花(アゲラタム、ラベンダー、キャットミント、ヒゴタイ、クレマチス・ジャックマニー)が輝き、それらの灰色や灰紫色の葉は不思議なほど涼しげで透明感がある」(12章18段落目参照)。これは赤い色をみていて灰色を見ると青緑が見える陰性残像現象を応用していると考えられる。

灰色の庭の色彩設計は灰色の葉を基調に、花の色は紫、ピンク、白である。使われている植物はシロタエギク、ラムズイヤー、サントリナ、ラベンダー、クレマチス、アツバキミガヨラン、キミガヨラン、イトラン、テッポウユリ、マドンナ・リリー、ノコギリソウ(ザ・パール)、カスミソウ、ゴデチア(ダブル・ローズ)、タチアオイ(アントワープ)、ソープワート、スイトピー、エリムス、アゲラタムの2品種となっている。

金色の庭は、中央に置くことによって、両側のオレンジと灰色の庭、ブルーとグリーンの庭側それぞれ最も引き立つことが「色彩の法則」によって説明される。灰色の庭から金色の庭をへて青い色の庭へ入ると、「眼は喜ばしいショックを受ける。」「なんといっても青い花がこんなに青いのは見たことがないという印象を受けるでしょう」(同22段落目)。金色の庭の特徴は樹木が中心となることで、それによって「植え込みのもつ陰影と堅実性が、目と心に休息を与え、色彩の庭をより楽しめるよう準備される。」植栽のヒントとして「金色は色の強さと変化の度合いが大きいので、種苗店で実際に見てから入手する。」などの記述もある。金色の樹木として使われているのは、紅葉するものや斑入りの品種で、プラタナス(スズカケノキ)、セイヨウヒイラギ、セイヨウイチイ、セイヨウニワトコなどである。樹木の間に黄色の一年草、ハナシュンギク、キンケイギク、マリーゴールド、キンギョソウなどが植え込まれるが、橙の色調の使用を禁じている。

青の庭は、青の美しさを引き出す庭を造ることが目的であって、青一色の庭を作ることを目的とするのではなく、むしろ補色の並置によって色の表現力を高めることが重要であると述べている。これは青の庭に対してだけ

ではなく、他の色でも同様であろう。具体的には、クレマチス・レクタ、宿根ルピナス、ヤマブキショウマ、ヘンルーダ、ユッカなどに中に淡い黄色のルピナス(サマーセット)や濃いカナリヤ色のキンギョソウ、タリクトラムの流れが植え込まれている。

緑色の庭は金色の庭と同様、樹木を中心とした区画で、植栽のアドバイスとして一本の潅木を植えたあと、それが成長するまでは空間は他の植物で埋めることを勧めている。集められた植物は、ウウラリア、イカリソウ、カンパニュラ、モモバキキョウ、ユリ、チューリップ、ジギタリス、キンギョソウ、シャクヤク、ヘレボラスなどで、花は目立たないものからやや大ぶりのものまで白い花を持つ植物で占められている。

(g)隠された庭

「隠された庭」〔Hidden Garden〕は5月の終わりから6月の初めの2週間のための庭である。樹木に囲まれた静かな場所にひっそりと存在し、色彩は「抑えられた色調」を基調としてピンク、淡黄色、白の花々が周囲の暗い樹木の背景の中で美しい情景を生んでいる。ライラック、ヨウシュカンボク、シロバナエニシダ、リキュウバイなどの5~6月に花を咲かせる樹木の下に、アイリス、オダマキ、イベリス、ブルーフロックス、地面に近いところにはシダの葉やレンテンローズ、イカリソウ、アマドコロ、ギボウシ、さらに丈の低いカンアオイ、クルマバソウ、バイカイチゲ、ハイユキソウなどがあって、控えめな花の色とそれぞれの特徴ある葉の調和が図られている。

この庭にはジークルの二つの願いが込められている。ひとつは静けさを、もうひとつは「まるでそこには何もないかのようなところに、おもいがけず小さな、しかし、美しい庭があることを」驚きを楽しむという喜びを、享受することである(12段落)。色彩については穏やかな色調に制限するようにと「場所が告げる」と述べている(4章4段落目)。また生命力を持った植物を素材にしていることが必然的に庭に不断の変化をもたらし、それに応じて新しい美が創造されていくために、「手入れの仕方は導かれて行うものだ」(11段落目)と述べ、この庭が周囲の西洋ヒイラギとカシの成長によって(日照の変化により)いずれはシダの庭に変わるということを予測している(10

段落目)。現在「ハット」の周囲と「隠された庭」のあった周辺は立ち入ることができないが、「隠された庭」は比較的早い時期に(ジークルの生前に)植物の生長によって消滅していたようである。

(h)森や庭の縁

1章に掲載されている林縁の色彩設計図は、ウッドランドの小道が森へ溶け込むように見せるための植栽図である。森や林の縁取りについては11章が独立して扱っているが、ここでは2章「森」と同様にウッドランドの景観を作り出すための植栽の技術や方法が述べられている。1章の設計図にはほとんど説明がないが、しかし2章とは別に11章で森や庭の縁を一区画として独立した章立てをするほど注意を払っていることは注目に値する。

設計図からは庭から森へと進む小道が、背景と調和するよう意図されていることが明らかである。まず庭から森へあるいは道路端から森に向って、前段から中段、後段へ向うに従って高さが徐々に高くなり、自然に変化する。色彩設計は西洋ヒイラギの暗い緑を背景にしながら、さらに背後に見えている白樺と灌木の植え込みが調和するように、花の色を決める。それによって視線が違和感なく森へ導かれるためである。

11章では日陰、日向、家の周囲に分けてそれぞれに適した植物や注意が述べられる。日陰の例として西洋アカマツの森の日陰にシャクナゲの縁をつくることが推奨されているが、その下草には泥炭質の土壌にあうシラタマノキ。半日陰にはトウワタリンドウ。日向に合う林縁はキスツス、その下草にはヒース、カルーナなどが勧められている。

バラを縁取りに使う場合は刈り込みが禁じられる。下草にはハシバミ、キイチゴ、スイカズラ、ジギタリス、スイセン、ドイツスズラン。ヒイラギなどに這わせて林縁に使う場合によい品種としてツルバラの「サンダース・ホワイト・ランブラー」や「ザ・ガーランド」があげられている。

庭と林をつなぐ縁にはシダ類とユリの寄せ植えを勧める。また低木と芝生の間に、芝生に接して大きさや形状がやや目立つ葉(ヒマラヤユキノシタなど)を配置するのがよいとしている。これらの実例は写真で紹介している[9]。林縁に向くその他の植物としては、「力強く堅実な」習性をもつとされ

るもので木立ルピナス、シャクヤク、ハアザミ、ヤマブキショウマの仲間、シダ類のうち大きなもの、キイチゴ、ササの仲間などがある。

「マンステッド・ウッド」のウッドランドではシャクナゲが林縁に近い場所に多く植えられているため、林縁の植栽としてシャクナゲが植栽されている区域に合う植物やそれらの植物の特性などが詳しく述べられる。「マンステッド・ウッド」はやや酸性のやせた土質であるが、シャクナゲはそのような場所で最もよく育つ性質を持っている。成功しているウッドランドの中のシャクナゲやアザレアの群生は、土質との関係によって樹種が選ばれた結果であった。

(i) 夏の花壇

ここで「夏の花壇」として扱われている花壇は、最盛期を7月末~8月に設定した1、2年草を主体とする花壇である。ここはレンガを積んで周囲を囲み、地面より50cmほどかさ上げしてレベルをあげたレイズド・ベッド〔raised bed〕とよばれる花壇となっている。

色彩設計は赤と黄色の2系統で相互に関連している。赤の区域はゼラニウムの赤系統の4品種で作られたグラデーションを中心に背景は赤のカンナ、中段にはグラジオラス、ダリア、ペンステモン、アンソロア、ロベリア・カルディナリス、サルビアの赤を入れる。これらの「赤の質感を高める」ために、前段には灰緑色の葉をもつムラサキベンケイソウを入れる。またこのグラデーションの間に白のテッポウユリを入れると絵画的な効果が得られるとしている。

黄色の区域は前段にマトリカリアとアップルミントを入れ、中段の黄色のカルセオラリアをひきたてる。背景は黄色のカンナ、中段にはキンギョソウの白と黄色、レモンホワイト、淡黄色のマリーゴールドとする。

この庭は9章で扱われているが、1914年に出版された本書の元となった*COLOUR IN THE FOLWER GARDEN*の1908年版には、この章だけが含まれていない[10]。ロビンソンやジークルが1880年代にカーペット・ベッディングの色彩のきついコントラストを批判したとき、そこで使われていた赤、黄色、青の色彩は具体的にはゼラニウム、カルセオラリア、ロベリアなどの植

物が使われていた。ロビンソンがこれらの外国産の植物を徹底的に批判しそれらを排除することを主張したのに対して、ジークルはカーペット・ベディングでは植物をどう取り扱うかという芸術的知識と感性の欠如が問題であるとして植物自体の美しさを表現する方法は別にあると述べていた。彼女はそれからおよそ30年後に、ここにその実際を提示してみせたのである。

(j) 家の周囲と中庭〔North Cort;Terrace Garden〕

この区域には独立した花壇はなく設計図もないが、家と庭の調和を主張したジークルの造園思想を考える際には触れておかなければならない区画である。ノース・コートおよびテラス・ガーデンを含むこの中庭はアーツ・アンド・クラフツの庭の代表的なものとしてしばしば紹介されている[11]。

イギリスの自然風の植栽の様式と対照的な様式のひとつにイタリア整形式庭園がある。これはロビンソンなどからは批判された様式であったが、ジークルはそこにも普遍的な美があるとして英国庭園への積極的な応用をはかった。一例としてイタリア庭園のテラコッタなど素焼きの壺やコンテナの配置は庭のデザインの重要な一部であることを認め、そこに植える植物の選択の他、それらが配置される場所の形状、舗装にいたるまで提言することを試み、より完璧な調和を求めている。

14章は「鉢植え植物の配置」と題してこの中庭を取り上げている。ここで主眼とされているのは、背景をどのようにして整えるかという点である。ポイントは背景になる緑の葉物を重視することで、そのために花の数は制限される。これまで見てきた庭と同様に、日陰、日向、半日陰となる場所によってどのような植物が適するか、またコンテナに適した植物について、その使用方法に対する注意点を含めて詳しく記述されている。

色彩に関する特徴は、葉物を使ってしっかりした背景をつくり花の色を1、2種類に制限すること、コンテナを初めとするガーデン・オーナメント[12]の色彩が葉の色と競合しないよう厳しく制限していることである。これらの塗装に関しては「最も落ち着いた緑色」を手に入れるために、自分で塗装顔料を調合できるように材料と配合を指示している。温室や保温室の塗料の

色も白ではなく、あたたかみのある「灰色」を「白色塗料に黒と生のアンバーをまぜて」作って塗装することを勧めている。全体の統一感を重視していたことは容易に理解される。

ノース・コートの重要な植栽に壁に這わせたつる植物がある。特にクレマチス・モンタナが英国の昔ながらの伝統的なティンバー・アンド・クラスター様式の壁にガーランドに仕立てられているのは、ジークルの代表的な植栽のなかでも極めて美しいとされている例である。13章はそれらのつる植物を扱っているが、家屋の壁に這わせる植栽の条件として、壁や家の種類、どんなものが隣接しているかを考慮すべきだとしている。

おわりに

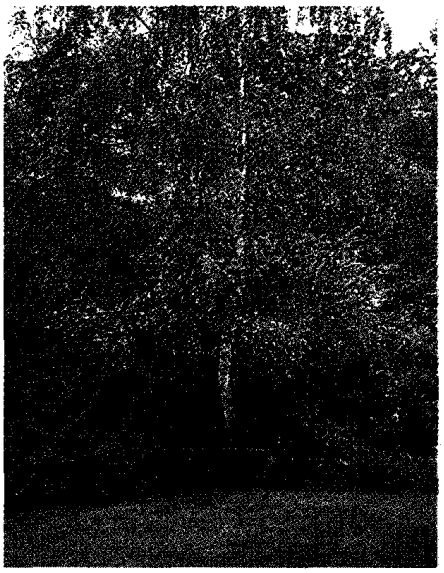
最後にジークルの色彩設計について本書の翻訳作業を通じて考えてきた点について簡単に述べておきたい。

Color Schemes〔カラースキーム〕は直訳すれば「色彩設計」だが、園芸で使われる場合、配色だけでなく植物の高さや背景、開花期など植栽上の問題も含まれるため、「花壇設計」と言い換えられると思う。しかし一方で　ジークルが――絵画を描くように――植物を用いる場合、描く対象は地面の上の花壇に限らず空間全体に及んでいた。背景になる樹木や家屋などの周囲の建造物との調和はもちろん、大気や光の差し込み具合にいたるまで、その場所の色彩に関係する要因はできるかぎり慎重に計算されている。たとえば森の風景の描写は春になる直前の光と空気の感覚を捉えているし（1章）、次のような叙述もある――ピンクのタチアオイは屋根裏部屋の窓と銀灰色の雨よけに映えるように高く直立しなければならなかった――（8章13段落）。ジークルに端を発するイギリスにおける園芸上のカラースキームはそのような拡がりを持っているといえるだろう。

造園と花壇作りの境界にあり、独特な世界を築いているこの園芸の領域を日本語に置き換えることは難しい。ジークル自身はこれをGardening〔ガーデニング〕と呼んでいるが、イギリスでランドスケープ・アーキテクチャー（造園）とホーティカルチャー（園芸）の間にあるものだとすれば、カ

タカナ語「ガーデニング」をそのまま使うのもむしろ悪くないのかもしれない。私はジークルの庭造りは景観の創造という意味で「造景」という言葉で言い表せるのではないかと考えている[13]。

マンステッド・ウッドでは敷地内の様々な場所で、奥行きや陰影の表現を工夫しながら、その場所ごとにふさわしい植栽が試みられていた。ジークルはそれまでの常識にはなかったグラデーションやパステルカラーの花を使う華やかな色彩設計を行った一方で、敷地全体から見ると、抑えられた控えめな色調を主体としている。『フラワーガーデンの色彩設計』の中でも目的の単純さ、シンプルであることの重要性を強調し、それが落ち着きとやすらぎをもたらすことを示しているが、このことはジークルが心と体の休息を庭に求めていたことを思い出させる(まえがき)。彼女は、庭が花々と群葉が描く最高の絵画的な美しさを備えた風景を通して、幸福(happiness)と心の休息(repose)を与える場所であることを求めていた。そして、そのような庭のお手本は「自然」にあった。


ベンチ

庭造りのインスピレーションの源泉は自然にあり、それを与えられた場所にふさわしく表現すること、ジークルのガーデニングの本質はそこにあると思う。広い空間でも、足元のわずかな場所でも、あるいは窓辺のウィンドウボックスでも応用できる幅の広さは、そのような本質をもつためだろうと考える。そこからジークルの色彩設計を見るとき、表面的なもの、流行にとらわれない庭造りというものが見えてくる。私達がジークルから学ぶのは、そのようなイギリスのガーデニングがもつ深さや奥行きなのではないかと考えている。

注

1　19世紀のイギリスの代表的な園芸家ガートルード・ジークルの代表的な著作。2005年から2006年まで園芸文化研究所において、本書の翻訳研究会が持たれた。詳細については、『園芸文化』第3号pp.86-94およびpp.123-137参照

2　図版出典　Judith B.Tankard,Martin A.Wood *Gertrude Gekyll at Munsted Wood*（1996）

3　Gertrude Jekyll *The Making of a Garden　An Anthology* p.167 図版参照

4　同　p.115　図版参照

5　三井秀樹『ガーデニングの愉しみ—私流庭造りへの挑戦』（1998,中公新書）pp.68～80.

6　Anne Scotto James *The Cottage Garden* PENGUIN HANDBOOKS

7　GERTRUDE JEKYLL *A Vision of Garden and Wood* p.50 図版参照

8　Herring Liliy；古くから鯡（herring）が来る頃咲く花として親しまれていた。

9　GERTRUDE JEKYLL'S COLOUR SCHEMES FOR THE FLOWER GARDEN p.111　–Begonias in a setting of bergenia foliage、GERTRUDE JEKYLL A Vision of Garden and Wood p.80 -Lilies and ferns at the wood edge near lawn

10　The "COUNTRYLIFE" LIBRARY COLOUR IN THE FLOWER GARDEN 1908

11　一例としてART and CRAFTS GARDENS 1912　Chapter V 'A GARDEN IN WEST SURREY' pp.64~74

12　鉢や壺、あるいはテラスに置かれる机や椅子などを指す。噴水や温室や保温室など大きなものはガーデン・ファニチャーとされることが多い。

13　野田正彰『庭園に死す』（1999,春秋社）に著者の造語として「造景」が使われているが、その定義も参照されたい。pp.38-39, pp.48-49.